The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	多言語・多文化授業環境を生かした国際理解教育の実践 : 大学生と高校生の交流会における一考察
Author(s)	宮本, 美能
Citation	多文化社会と留学生交流 : 大阪大学国際教育交流センター研究論集. 2011, 15, p. 61-68
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/50743
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

多言語・多文化授業環境を生かした国際理解教育の実践

― 大学生と高校生の交流会における一考察 ―

宮本　美能*

要　旨

2008年に文部科学省が「留学生30万人計画」を策定して以来、来日する留学生の数が益々増加する中、2009年には、国際化拠点整備事業（グローバル30）が採択され、留学生の数を増やすだけではなく、受け入れ体制の充実について具体的な内容が提示された。その1つとして、英語による授業の整備が挙げられている。筆者はグローバル30の1大学において、留学生と日本人学生が共に英語で学ぶ混合クラスを担当し、2010年の前期に「国際理解教育の実践」というタイトルで全15回の授業を受け持った。その中で、授業の一環として受講生の大学生が、ある高等学校（ユネスコ協同学校）を訪問して高校生と交流する機会を取り入れた。本稿は、この交流会前の準備から交流会後の振り返りの時間までを取り上げて、交流会を通して大学生（留学生と日本人学生）と高校生が「双方向の学びを得るために必要な要因」や交流意義について考察する。

【キーワード】混合クラス、国際理解教育、交流会、交流意義、交流内容の工夫と目的の明確化

1　はじめに

筆者は2009年に携わっていた小学校での経験をもとに、『多文化社会と留学生交流　第14号』の中で、2011年度より新たに導入された「小学校外国語活動」について、国際交流を取り入れたカリキュラムを提示した（宮本　2010）。そこでは、「小学校外国語活動」は知識を重視した教科ではなく、コミュニケーション能力の育成を目指して、国際理解教育を視野に入れた横断的な内容にする必要があると主張した。その例として、国際交流活動を紹介し、その中で留学生を受け入れる学校側（以降、「ホスト」とする）の小学生の立場から、留学生と交流する意義について検討した（宮本　2010、72-73頁）。しかし、交流会に参加した留学生の立場については触れていなかったため、本稿では、訪問する側（以降、「ゲスト」とする）から交流する意義を考察することにした。

日本国際理解教育学会や教育現場では、今までに数多くの交流事例を紹介してきた。例を挙げると、李は、先行事例の中で200近くの国際交流を考察しており、交流会の成功は、生徒から満足を得るだけでは不十分で、教師、生徒、サポート組織、留学生の「4者協同による学びのプロセス」を形成することが重要であるとの結論に至ったという（李　2007、42頁）。同じく国際理解教育学会の石塚は、「送り出す大学側と受け入れる小中学校側とが密に連絡を取り合い、協働でサポートする姿勢が必要である」と述べ、「送り出す大学の果たす役割が大きい」ことを強調している（石塚　2004、89頁）。本稿では、大学教育の授業の中に交流会を位置づけ、ホストだけではなく、ゲストの教員も積極的に企画・運営を行うことで、ホストの教師と生徒、ゲストの教員と学生の4者協同を目指す。

ここで、留学生と日本人の交流意義という観点から白土・高松の見解を挙げると、交流会に参加する

* 大阪大学国際教育交流センター助教

ことを通して、①留学生にとって日本人との交流を始める契機になる、②日本人にとっては異文化理解の場になる、③留学生と日本人の間に信頼感や安心感を築き、ひいては日本人の閉鎖性への挑戦になりうる、という点を効果としてまとめている（白土・高松　1999、40頁）。つまり、交流が留学生と日本人学生の異文化接触の機会になるというのだ。

次に、筆者の授業について説明をしておくと、全学的に誰もが受講できる選択科目の位置づけにあり、理系・文系、学部・大学院、留学生・日本人学生など、多様な学生が集まってくる。留学生は、交換留学生として6か月～1年間のみ日本で学ぶ学生もいれば、正規生として学部・大学院に在籍する学生もいる。ここでは、クラスそのものが異文化接触の環境にあり、クラス内で日常的に多言語・多文化の学生が交流し合っていることになる。その中で、本稿で紹介する大学生と高校生の「交流」は、国と言う枠組みに捉われず、年齢の異なる大学生と高校生の交流も含めて考えている。以上のような背景から留学生と日本人学生を同じ「大学生」と表現している。

今回の交流会の特徴をまとめておくと、1. 交流会を授業の一環に位置づけたこと、2. 年齢的にも近い大学生と高校生の交流であること、3. ゲストの大学生には留学生だけではなく日本人学生も含まれていること、になる。

2. 先行研究

本項では、ホストとゲストの立場から「交流会」を考察した先行事例を紹介し、本稿で参考にする枠組みを検討したい。

1つ目に挙げる先行事例は、前項でも少し紹介したが、李が183例にも渡る生徒と留学生の「国際交流事例」から分類分けをして5校に絞り、ホストの立場から考察をしたものである。ここでのホストは小学校（3年～6年）であった。また交流形態は、3種類「遊び型」、「講演」、「質疑・応答型」であり、それらを留学生の人数や日本語力によって分けていた（李　2007、40頁）。李は、5校の事例を分析する中で「学びのプロセスにするための要因」として、1. キャッチボール度、2. 位置取り、3. 交流人数、4. 活動構成、5. 交流内容、の5つを挙げた（李　2007、37頁）。この1つ目の「キャッチボール度」について、李はホストの生徒とゲストの留学生が、双方向にキャッチボールをすることであると説明し、その為には、2つ目の「位置取り」が必要になるのだという。また、この「位置取り」とは小グループ交流のことを指しているという。3つ目から5つ目の要因については、原則として（人数の大小に関わらず）、生徒と留学生が接する機会を増やすことが重要であるが、留学生の人数が少ない場合には、講義形式になることもあるという。そして、これらの5つの要因は、単独では交流効果が生まれないとして、各要因が関わり合いを持つときに、効果が得られるのだと主張している（李　2007、37頁）。

ただ、この5つの要因が全て満たされなくても交流会の成功はありうることを補足しており、次のような例を挙げている。小学校の生徒が国語（教科）の授業で朝鮮半島の伝来童話である「三年峠」を学んだ後、生徒が自ら興味・関心を持って韓国について調べ学習を行い、最後に韓国の留学生と交流をするというものであった。ここでの交流会は、60名の生徒に対してわずか6名の留学生で、交流形態は「遊び型」であった。人数の割合から考えれば、十分なキャッチボールはできなかったが、それでも他の交流事例と比べて、生徒側に積極的な姿勢が見られたという。李はその理由について、国語の授業から交流会までの内容に一環性があったことを挙げ、そのことが生徒の参加意欲を高めたと述べている（李　2007、37頁）。このことは、5つの要因に加えて、交流前の学習内容との関係性が重要であるという示唆でもあろう。

次に、李は別の事例を挙げて、生徒が留学生の出身国について事前に調べ学習を行い、留学生の前で発表するという交流形態の場合、留学生は生徒にフィードバックをする役割を課されており、これが交流意義につながるのだと説明している（李　2007、35頁）。一方問題点として、教師が留学生を出身国の代表者と思い、留学生から知識を得ようと

する場合があると指摘する（李　2007、33-34頁）。このような交流となれば、留学生と生徒が共に学ぶというキャッチボールは成り立たない。つまり重要なことは、交流会に参加するゲストも主体的に関わる役割があり、ホストとゲストの双方からのキャッチボールをすることにある。

2つ目の先行事例として、日本政府が1988年から実施してきた「世界青年の船」の船上セミナーを紹介したい。この船は、日本人青年と世界の青年が船の上で共に生活し、船上で行われるセミナーに参加すると言うものである。この「世界青年の船」について、橋本は異文化との接触や交流を目的とした、人為的に作られた環境であると説明している（橋本　2006、51頁）。この船上で行われた交流は、ホストとゲストと言う区別がなく、参加者は同じ立場で関わっている。橋本は2002年にセミナーを担当するアドバイザーの一人として乗船し、「異文化間コミュニケーション」という授業を担当した。この時には、日本から120名の青年と、その他12か国から135名の青年が参加していた。セミナーは3日間3種類開催され、参加者の青年には、いずれかを選んで参加する自由が与えられていた。まず、これらのセミナーの中で問題になるのは、言語である。橋本は共通言語を「英語」としながらも、特に言語面のハンディにより日本人を含む非英語話者の活動が制限されることのないよう、参加者間の相互作用を大切にした。橋本は、「英語によりうまくコミュニケーションを取ることができない場合、生徒がそのことでストレスを抱えるとすれば、その自分たちの経験そのものを観察、分析、話し合うこと、が重要である」と説明している。また、その為に「英語話者が自己の特権性に気づくためにディスエンパワーメントし、非英語話者がエンパワーメントできるような働きかけが必要である」という（橋本　2006、55-56頁）。

そして、橋本は自身のセミナーにおいて、参加者の背景、参加目的、特殊な環境と制約を配慮しながら、次のような活動目的を提示した。

1. 船での集中的な異文化接触経験を通して、文化や異文化間コミュニケーションについて考える
2. 自分の経験や意見を他の参加者と共有することによって、自らの考えを深める
3. セミナーの中で議論し考えたことが、参加者自身の船内での経験をより豊かにするのに役立つようにする（橋本　2006、52-53頁）。

また、以上の目的を達成するために、授業では文化紹介の時間を設け、あえて国という枠組みを出して、自文化を静的、固定的なものと捉えてきた自己に気づかせ、そこから動的な文化への理解に発展させるような仕組みを用意した（橋本　2006、62頁）。橋本は、「文化」と言うテーマで交流を持つとき、単なる「うわべ」の国際交流や多文化主義にならないような工夫が必要であり、その為にも、自文化を礼賛し、その上で文化の境界の不確かさや流動性の意味について考察を広げていく必要があるという（橋本　2006、61頁）。

ここで橋本の事例をまとめておくと、1. 言語面でのハンディを回避するために、母語話者の力能をディスエンパワーメントすることで、非母語話者との優劣のバランスを維持すること、2. 学生の参加意欲を高めるために、参加者の背景や状況を配慮した活動目的の明確化が重要であること、3. 文化に対する境界の不確かさや流動性、多様性、力関係についても考える必要があること、であろう。いずれの点においても参加者全員が双方向の関わりを持つために言語や文化の多様性に対して、配慮することが強調されており、後述する筆者の事例においても参考にしたい。

3つ目に、ゲスト側の立場から考察した先行事例として、大島・田村の留学生と小学生との国際交流を紹介する。李の先行研究では、交流形態について「遊び型」「講演」「質疑・応答型」の3つを挙げていた。大島・田村は、「受信型」「発信型」「双方向型」の3つを挙げ、特に「双方向型」は、さらに①情報交換を伴うコミュニケーション、②共通の目的に向けた活動、の2つに分けられると説明し、双方向型の交流行事こそが双方の学びのプロセスを築く上で効果があると主張している（大島・田村　2001、62頁）。

大島・田村は、交流行事を通して留学生が学んだ

ことについて、「日本の子供の考え方や学校の様子」「知らなかった言葉を覚えた」という日本に対する知識の獲得や、「子供に教えるために自分自身が母国のことを勉強した」という自国を見つめ直す機会になった点を挙げている（大島・田村　2001、74頁）。石塚（2004）も小・中学校での交流意義について、留学生の立場から大島・田村と同じ視点を挙げているが、留学生が日本の生徒と触れ合うことで「日本や他の地域の文化と比較する視点が生まれる」という点を付け加えている（石塚　2004、88-89頁）。以上の大島・田村と石塚の見解を合わせて考えると、留学生が日本の学校を訪問することで、1. 日本に対する理解の深まり、2. 自文化の再認識、3. 日本における自分の立場を確認する、といった効果が得られることになる。

また、大島・田村は交流意義について留学生にインタビューを行っている。その結果、より深い交流会にしていくためには、①コミュニケーションが双方向に行われていること、②両者が互恵的な関係にあること、という2つの要因が明らかになったとまとめている。さらに、この「互恵的な関係」を築くために、留学生が小学生との交流を通して、「役に立っている」という実感を得ることが重要であるという（大島・田村　2001、76-77頁）。つまり、留学生と小学生が共に学ぶためには、留学生にとっても交流会に「参加してよかった」という満足感につながる内容でなくてはならない。ただ交流する相手が小学生なのか、中学生・高校生なのかによって、交流内容や形態も変わってくるため、対象や状況にあわせた工夫が必要となろう。

ここで本項で挙げた、3つの議論をまとめておくと、交流会を通して双方が学びを得るために必要な要因は、①交互コミュニケーション、②両者の互恵的な関係、③交流内容や形態の工夫、となろう。次項以降の実践例ではこの3つの視点を参考にしていきたい。

4. 交流会

本項では、筆者が授業の一環として企画した交流会をエスノグラフィックに記述する。初めに、授業概要を説明しておくと、筆者はA大学で2010年4月に、留学生と日本人学生が共に英語で学ぶ混合クラスを担当し、「国際理解教育の実践」という科目を開講して、全15回のカリキュラムを組んだ。登録者数は45名で、カリキュラム構想は、1. 議論&アクティビティ、2. プレゼンテーション、3. フィールドトリップ（本稿で言う「交流会」を指している）、とした。授業の目的は、参加者が「国際理解」に対する知識だけではなく、技能や態度も身に着けることとしていた。そして、前半には「国際理解教育」に関わるユネスコ勧告や国際レベルでの実践例を中心に取り上げて議論し、後半にはプレゼンテーションや高等学校の訪問と交流を取り入れた。

本項では、3つ目の「フィールドトリップ」を取り上げて、事前準備段階、交流会、振り返りの時間、を中心に紹介する。訪問した高等学校は、2004年1月からユネスコ協同学校プロジェクトネットワークの1校に認定され、毎年アジアの国々の学校と共同プロジェクトを実施してきており、日本の高等学校の中でも先進的に「国際理解教育」の実践をしてきている。交流会の日程は、授業の12回目にあたる2010年7月下旬の授業日で、交流時間は通常の授業と同じく1時間半とした。

4-1　事前準備段階

4-1-1　訪問校との打合せ

ここで本稿との関係で一言だけ述べておくと、交流会の1か月前より、ホスト側の担当教員と3回に渡って当日のスケジュール、事前準備、参加者の名前や国籍、交流内容について打合せを行った。そして、「交流会の成功」を目指して準備にあたった。

4-1-2　参加学生への事前連絡

交流会1週間前の授業の中で、筆者は参加者に日程と待ち合わせ場所を確認した。移動時間を含めると、拘束時間が授業時間を越えることから、他の授業との関係で参加できない学生もあり、参加予定者は27名であった。参加者には、「当日、自分の大切にしているものを1つ持ってくること」を伝えた。

交流会で双方向の学びを得るためには、ホストの高校生に迎えられるだけでなく、ゲストである大学生も高校生に紹介したいと思うものを準備することで交流を深めることができると説明した。また、高校生の中には、十分に英語で表現できない生徒がいることを伝え、交流会ではコミュニケーションの手段として、「英語」以外の表現方法を工夫し、相互理解に努めるようアドバイスをした。

4-2 交流会（当日）

参加者は予定より少なく、19名（内、アジアの留学生10名、北米の留学生3名、オセアニアの留学生2名、ヨーロッパの留学生2名、日本人学生2名）であった。学校に到着後、浴衣姿の高校生が正門で待っていた。高校生に誘導されて会場に入り、大学生（19名）と高校生（42名）のマッチングで交流会が始まった。高校生は、事前に渡した参加学生の名簿を基にグループ割をして、手作りの名札を机に並べて準備をしていた。マッチングでは、大学生の名前が一人ずつ呼ばれ、順番に名札の席に座った。交流会は、2名の高校生による司会で、日本語と英語のバイリンガル方式で進められた。

1つ目のプログラムは、大学生が主役となり、箸を使って、皿の豆をできるだけ早く、別の皿に移すというゲームであった。第1ラウンドが終了すると、テーブルの中で勝者となった大学生が、今度は前に出て代表としてグループ対決を行い、勝ち抜いた者には景品が渡された。

2つ目のプログラムは、盆踊りであった。会場いっぱいに大学生と高校生が広がり、共に踊った。初めて盆踊りを見た留学生は、恥ずかしそうに高校生に習った。

3つ目のプログラムは、各テーブルに戻り、大学生が事前に用意してきた「自分の大切にしているもの」を披露するグループ交流であった。約1時間の交流は、時間が足りないと声を漏らすほど交流が深まったグループもあれば、時間を持て余したグループもあった。

最後は、インドネシアの留学生がクロージングスピーチをして、全員で記念写真を撮って終了した。

一見交流会は成功したように見えた。しかし、交流会の途中で「アルバイトがある」と言って席を立った留学生を初め、5名が交流会の途中で会場を退出していた。活動終了後の後片付けまで残った大学生は、5名（全員が留学生）のみであった。当初の予定では、駅まで高校生と共に歩きながら交流を続けるというものであったが、全スケジュールに参加した学生は、後片付けまで残ったこの5名だけであった。

4-3 振り返りの時間

交流会実施1週間後の授業で、大学生と筆者が振り返りの「対話」を行った。交流会が一過性のイベントに終われば、学生は「楽しかった」という感想に終わり、教育効果にはつながらない。今回の交流会では、次の活動につなげるために交流会後の「振り返り」も重要であると考えていた。また、交流会について意見交換する中で、言語・表現方法、交流意義について、今後の課題も示唆された。

以下に学生の意見を紹介する。筆者の方でプラスの感想とマイナスの感想に分け、強調したい点に下線を引いた。この振り返りの時間も英語で行われたことから、筆者が日本語に訳して記述していることを断っておく。なお、学生には研究の目的で個人が特定されない範囲で、発言を引用することについて、書面で同意を得ている。

（言語・表現方法）

プラスの感想

- 私のグループの高校生はほとんど英語が話せなかった。<u>コミュニケーションをとるために日本語を使ったり、絵を描いたり、実物を示したりした。言葉を使わなくてもコミュニケーションが可能であることを体験できた。</u>また、<u>日本語力も伸びた</u>気がする（北米の留学生）
- 自分のグループには英語のできる人とできない人が混ざっていた。交流を通して、<u>お互いを理解しようと努力する中で、国際理解を体験することができたと思う</u>（北米の留学生）
- ユネスコ協同学校というだけあって、何か違う

と思った。今回改めて、コミュニケーションは英語だけではないことを実感した（アジアの留学生）

マイナスの感想

● 自分のグループには英語を話せない人が多く、会話にならなかった。何とか日本語で話した。自分から色々話題を持ちかけたが、何も得ることがなかった（オセアニアの留学生）

（交流意義）

プラスの感想

● 今回の交流会では、高校生が積極的に自らふるまおうと努力している様子が伝わってきた。こうした交流会を続けていくことに意義があると思う（日本人学生）

マイナスの感想

● 今までにも学校を訪問してきたが、いつも同じような印象を受けてきた（ヨーロッパの留学生）

● 自分のことを外国人扱いしていると思った。あるトピックについて話したいと思っても、表面的な話しかできなかった。本当に自分の国に興味を持っているのか分からない（ヨーロッパの留学生）

● ユネスコ協同学校ということで、他の学校訪問で得られない特別な経験ができると期待した。でも、他の学校と変わらなかった。高校生に今回の交流会の目的を聞いてみたが、誰も答えられなかった（ヨーロッパの留学生）

● 大変良い体験になったが、内容面を工夫すべきだと思う。高校生と遊ぶことが交流ではない。グループも決められていたので、他の高校生と話ができなかった。席替えをして、もっと色々な人と交流したかった。また、生徒はみんな恵まれた環境で成長してきたことが分かった。もっと批判的な目を持つ必要があるのではないかと思う。人間として成長できるような議論がしたい（アジアの留学生）

以上の意見から、言語、表現方法については、大学生と高校生が言語の壁を越えて交流できたというプラスの感想と英語でコミュニケーションができなかったというマイナスの感想が出されたことが分かった。このことは、言語以外の表現方法を工夫して、相互理解に努めようという前向きな姿勢が芽生えた学生と、そうではない学生に分かれた結果であると考えられる。交流意義については、高校生の積極的な姿勢を評価する意見も出されたが、一方で留学生から「外国人扱いされていると思った」という感想が出されており、このことは今後の交流会の課題として検討すべきであろう。また、交流会の内容や目的について、批判的な指摘も出されたことから、交流内容の工夫と目的の明確化の重要性が強調された。

授業後、交流会当日に渡したフィードバックシート（注を参照）を回収したところ、2名の学生が「不満が残った」と回答していたことが分かった。1名（オセアニアの留学生）は交流会自体を否定しており、もう1名（ヨーロッパの留学生）は、「どちらとも言えないが、交流会の趣旨が分からない」と記載していた。その理由については、前述したマイナスの感想と重なっているためここでは省略する。

5. 考察

今回の交流会について、事前準備を振り返ってみると、筆者自身は訪問当日の交通手段の手配や、訪問先の教員との打ち合わせなど、準備に相当の時間を費やしたと考えていた。しかし、これらは形式的な準備にとどまっており、参加する学生との間に一致した目的がなく、その結果、学生の主体的な参加につながらなかった。李の先行事例では、生徒が留学生の出身国について調べ学習を行い、留学生がフィードバックを行うことが、留学生にとっての交流意義につながるとという点が挙げられていた。大島・田村の先行事例では、留学生が生徒と交流することで、生徒から日本についてより深く学ぶ機会になることや、留学生の出身国について見つめ直す機会になることなどが留学生の意見として挙げられていた。これらは、生徒と留学生が「自文化を紹介する」というテーマで交流し、その中か

ら双方が新たな気づきや学びを得た結果であった。今回の交流会では、高校生から日本の遊びや盆踊りといった文化紹介を通して、大学生と共に関わる活動をした後、大学生から準備してきた物の紹介をするという時間があり、その意味では「自文化の紹介」に共通するテーマがあったと考えられる。ただ、当日のスケジュールやテーマについて、事前に大学生と高校生の間で共有できていたわけではなかった。

ここで、先の橋本（2006）の事例を参考にしながら今回の高校生と大学生に共通する交流会の目的について考えてみると、次の3つにまとめられよう。1. 大学生と高校生が異文化接触体験を通して、相互に文化や異文化間コミュニケーションについて考える機会を持つこと、2. 自分の経験や意見を他の大学生と高校生が共有することにより、相互の考えや理解を深めること、3. 交流会を通して得られたことが、大学生と高校生の経験をより豊かにし、双方の人間的な成長につながること、となろう。これらの目標が、事前にホストとゲストの教員と学生の4者間で共有できていれば、交流会に参加する大学生と高校生の意識も変わったのではないだろうか。

6. まとめ

本稿では、留学生と日本人学生の混合クラスにおいて、授業の一環として大学生と高校生の交流会を取り入れ、交流会後の振り返りの中で得られた大学生の意見を中心に紹介した。事前に、大学生には「自分の大切にしているもの」を準備してもらったが、それだけでは大学生と高校生の間に「互恵的な関係」を築くことができなかった。そこでは交流内容の充実やテーマの共通理解といった点で、今後の課題として残された。さらに、交流会の目的の明確化が指摘された。ホストの高校生とゲストの大学生の参加意欲を高めるために、目的意識を持って交流会に臨むことが重要となろう。

以上、課題は残されているが、本稿で紹介した「交流会」はいわゆる留学生と生徒と言った国際交流ではなく、日本人学生も含む「大学生と高校生」の交流というユニークな取り組みであったこと、また、授業の一環として位置付け、学生と共に振り返る機会を持ったことで、ゲストの大学生から交流会に対して重要な示唆が提示されたことを強調しておきたい。今後も、国と言う枠組みに捉われず、年齢を越えた異学年交流なども含めて、個と個の交互交流が、益々活発化することを期待している。また、交流会を企画するうえで、今回の考察結果で明らかとなった「交流内容の工夫と目的の明確化」がキーワードになることをまとめとしておきたい。

注

Feedback from school visit

Name: _____

① Did you enjoy school visit?
Yes・No (if no, write the reason) _____

② Do you want to visit school again? Is it the same school or different school? If different, write the reason:

③ Did you find any difficulty in communicating with high school students?

④ Did you use special methods to communicate with students? (Write in detail.)

⑤ Are there any new findings from school visit?

⑥ How would you explain about the visit to our classmates who could not attend?

参考文献

石塚美枝（2004）「小中学校における交流活動参加を通した留学生の学び」『国際理解教育』日本国際理解教育学会

大島まな・田村知子（2001）「留学生を活用する国際教育の内容・方法と教育効果に関する研究」『生涯学習研究センター紀要第6号』九州共立大学

白土悟・高松里（1999）『外国人留学生の相談指導のためのガイドブック』九州大学留学生センター

橋本　博子（2006）「集中的な異文化接触経験と異文化間教育」『異文化間教育23号』アカデミア出版会

宮本　美能（2010）「小学校外国語活動のカリキュラム案とその実践」『多文化社会と留学生交流

第14号』大阪大学留学生センター
李　炫延(2007)「国際理解教育の実践分析」『国際理解教育13号』日本国際理解教育学会